

新・人間革命

The New Human Revolution

[第6卷]

池田大作



聖教新聞社

池田大作

新人



命

第6卷

聖教新聞社

新・人間革命 第6巻

発行日 一九九九年十月十二日

著者 池田 大作

発行者 白井 昭

発行所 聖教新聞社

〒100-8006 東京都新宿区信濃町一八
電話 〇三―三三三―五三一六―一―(大代表)
振替 〇〇―一五〇―四一七九四〇七

印刷所 明和印刷株式会社

製本所 大口製本印刷株式会社

*
定価はカバーに表示してあります

落丁・乱丁本はお取り替えいたします
© D. Ikeda 1999 Printed in Japan

目

次

主な参考文献	語句の解説	若	波	加	遠	宝
384	371	鷺	浪	速	路	土

304	241	165	78	7
-----	-----	-----	----	---

新・人間革命 第6卷

挿 装
画 画
内 東
田 山
健 魁
一 夷
郎

宝^{ほう}

土^ど

新世紀の大舞台は、世界である。そこには、戦火にあえぐ友がいる。悲嘆に暮れる母がいる。飢えに泣く子らもいる。

泉が砂漠をオアシスに変えるように、人間の生命からわき出る慈悲と英知の泉をもつて、この地球を平和の楽園へ、永遠の宝土へと転じゆくヒューマニズムの勝利を、我らは広宣流布と呼ぶ。

一九六二年（昭和三十七年）一月二十九日、山本伸一は中東へ出発した。

午前十一時に羽田の東京国際空港を飛び立ったSK（スカンジナビア航空）九八四便は、最初の経由地であるフイリピンのマニラに向かっていた。

伸一の今回の正式な訪問国は、イラン、イラク、トルコ、ギリシャ、エジプト、パキスタ

ン、そして、タイの七カ国であり、イランの首都テヘランが第一の訪問地であった。

訪問の目的は、現地の会員の指導、宗教事情の視察等々である。

同行のメンバーは、今回は青年に絞り、青年部長の秋月英介、青年部の幹部である吉川雄助、黒木昭の三人の理事であった。

伸一のこの中東訪問を最も喜んでくれたのは、当時、東京外国語大学でアラビア語の教鞭を執り、後に日本で最初の『アラブ語辞典』を執筆・編集し、発行する、河原崎寅造というアラブの研究者であった。

伸一は、出発の前々日の一月二十七日に、河原崎と初めて会った。

その日は、聖教新聞社で東洋学術研究所（後の東洋哲学研究所）の発足式が行われた。

この研究所は、一年前のアジア訪問の折に、伸一が構想し、提案したもので、東洋の思想・哲学の学術資料を収集し、アジア文化を研究する機関である。これが、学会が設立する各種文化団体の先駆けとなったのである。

席上、伸一は、この研究所から、世界的な学術研究者を輩出し、新文化を創造する知性の府としていってほしいと要望。そして、メンバー一人ひとりに研究所のバッジを手渡し、自分もそのバッジを胸につけた。それは、彼も所員の自覚で、学術研究者を育成していこう

とする、決意の表明でもあった。

伸一は、そのあと、学会本部で河原崎と会うことになっていた。

河原崎の所属する組織の幹部から、アラブの専門家の会員がいるので激励してほしいとの、要請を受けていたのであった。

彼は、まず自ら、真つ先に学術研究者の育成に取り組んだのである。

河原崎寅造は、黒ぶちのメガネに口髭をたくわえ、堂々たる体格をした「快男児」といった印象の、四十代後半の壮年であった。

伸一は、河原崎を丁重に迎えた。彼は、中東訪問を前に、アラブの事情に精通した河原崎から、旅のアドバイスなども受けられればと思っていた。

「お忙しいところ、わざわざおいでいただいて申し訳ありません」

伸一が言うと、河原崎は抑揚のある、大きな声で答えた。

「いいえ、いいえ、とんでもございません。今回、山本先生がアラブにも足を運ばれると聞きまして、私は大変に嬉しく思っております。アラブは私の第二の故郷なんです」

河原崎は青年時代に外務省の留学生としてエジプトに渡り、カイロ大学のアラビア語科を卒業したあと、エジプト、イラクなどの中東各地の日本公館に勤務し、アラブの文化への造

詣を深くしていった。

戦後、官僚生活を嫌って外務省を辞めると、経済苦との戦いが待っていた。しかも、妻と息子が結核に侵されていたのである。

河原崎一家の苦境を見かねた親戚から、最初に、妻が仏法の話聞き、一九五三年（昭和二十八年）の夏に信心を始めた。その妻の勧めで、河原崎も翌年の四月に入会した。

しかし、学会に関心があつたわけではない。愛する妻の頼みなら、できることは、なんでもしようという思いからであつた。

そのころ、アラブの石油資源が日本でも脚光を浴びてきており、河原崎は、ある石油会社に勤務するようになった。その後、別の石油会社に迎えられ、やがて調査役となり、再びアラブの砂漠を闊歩するようになった。日本による、アラブでの初の油田開発にも携わり、東京外国語大学でも、講師としてアラビア語を教えるようになった。

河原崎は、頬を紅潮させながら、中東情勢を語り始めた。

「ご存じのように、中東は『世界の火薬庫』といわれておりますが、その背景には、豊富な石油資源を持つアラブ諸国を巡る、東西両陣営の争奪と衝突があります。アラブ諸国は植民地としてヨーロッパに支配され、独立も遅れました。それだけに、アラブの結束を図る

うとする流れがあり、それが、民族主義の台頭をもたらし、ともいえます。

しかし、イスラム教をもとに、アラブの結束が強まるにつれて、一方では、ユダヤ教の国であるイスラエルとの対立の溝は、ますます深まっています。

また、*アラブ連合共和国からのシリアの脱退ということもあり、アラブが団結を図っているのは、数多くの問題があります。

さらに、石油を発掘し、国が豊かになったことによつて貧富の差が広がっているという面もあります。そうした国では、革命が起こる可能性が非常に高い。

つまり、アラブには、東西冷戦、民族紛争、宗教紛争、階級闘争など、あらゆる対立の構図があります。

中東は、地理的にも、アジア、ヨーロッパ、アフリカを結ぶ懸け橋です。また、今や国連に加盟したA A（アジア・アフリカ）グループは四十八カ国を数え、そのなかでアラブ諸国は、大きな一角を占めております。つまり、今後のアラブの動向が、世界平和の鍵を握っているともいえます。

しかし、日本の官僚も、政治家も、経済人も、アラブを単に石油の取引の対象としてしか考えておりません。石油の確保に影響がなければ、アラブで何が起ころうが、対岸の火事の

ような見方みかたをしている。本ほん当とうに残念ざんねんなことです。

また、日本人は、アラブのことについては、ほとんど何も理解りかいしていません。

アジアの西にしにある中東ちゆうとうと、東ひがしにある日本はもつと交流こうりゆうし、ともに互たがいの国のために、何ができるかを考かんえていくべきです。そこに、国境こくまうを超こえた人間じんげんの連帯れんたいが生まれ、それが世界せかいに広ひろがれば、平和へいわの下地したじが築きずかれていくというのが私の意見いけんなのです」

山本伸一やまもとしんいちが言った。

「全まったく同感どうかんです。あなたのアラブを愛あいする心こころが、よくわかります。私が今回こんかい、アラブを訪まづ問もんするの、そのためです。

平和といっても、決して特別とくべつなことではない。まず人間の心と心こころを結むすび合あうことから始はじまります。それには、文化ぶんかの交流こうりゆうが大切たいせつになります。私はアラブと日本の間あいだに、平和と文化の交流こうりゆうの道みちを開ひらいておきたいのです。

日本では、欧米おうべいの文化ばかりが、もてはやされていますが、欧米だけが外国がいこくではない。アラブにはアラブの文化があり、日本が学まなぶべきことも、たくさんあるのではないか、と思おもいます」

「そうなんです。そうなんですよ、山本先生やまもとせんせい」

河原崎の目が輝き、口元に微笑が浮かんだ。

二人の語らいは弾み、心は、強く、激しく、共鳴していった。

伸一は言った。

「実はさきほど、東洋学術研究所という研究機関の発足式を行いました。これは東洋を中心に、世界の文化や宗教、民族性などを研究して、人間の相互理解を図る糧とし、東洋、さらには世界の平和に寄与していこうとするものなのです」

「その東洋学術研究所というのは、創価学会がおつくりになったのですか」
河原崎が尋ねた。

伸一は、ニツコリと頷いた。

「そうです。学会が母体となつて設立した学術研究所です。人類の相互理解を図るためには、それぞれの国や民族の文化を研究し、理解することが不可欠ですから。

宗教の使命というのは、民衆の幸福と世界の平和を実現することであり、それを本氣になつて考えているのが創価学会です」

伸一の言葉を聞くと、河原崎は、背筋を伸ばし、膝の上に両手を揃えた。

「山本先生、どうも私は創価学会について、誤解をしておったようです。」

正直なところ、拝めば病気が治るなどといって、勧誘するだけの宗教ではないかという考
えが、頭のどこかにありました。もちろん、信仰によつて病気が治るということもありえる
とは思いますが、いわゆる功德ということも、あるのかもしれないとは思っていました。

だが、学会が平和といった課題に、本当に取り組もうとしているとは思っていませんで
した。平和を口にする宗教者は多いが、そのために本気で行動する人は、あまりにも少
なかつたからです。しかし、今のお話を聞いて、敬服いたしました。

実は今日も、家内から、山本先生がお会いしてくれるそうだから、ぜひ行くようにと言わ
れ、家内の顔を立てるつもりで来たのです。

山本会長はアラブにも行かれるというし、妻がお世話になっている教団の会長さんに、一
度ぐらいいざつしておくことも、よいのではないかと思ひまして。

しかし、不遜でした。自分で確かめもしないで、偏見をもつて学会を見ていたのです。申
し訳ないことをしました」

河原崎は、こう言うと、深々と頭を下げた。それを制して、伸一が言った。

「真実を知らなければ、誤解があるのも当然です。では、河原崎さんは勤行をしたことも
ありませんね」